

経済的に困難な家庭で育つ「子どもの居場所」

—無料学習支援団体 S 塾の事例を中心に—

佐川 桃果（永野ゼミナール）

HS22-1102K

目次

はじめに

第 1 章 子どもの貧困について

第 1 節 子どもの貧困とは

第 2 節 子どもの貧困の現状

① 貧困の世代的再生産について

② 貧困世帯の保護者の現状

③ 貧困世帯の子どもの現状

第 3 節 国による対策

第 2 章 子どもの居場所の可能性と課題

第 1 節 子どもの居場所とは

第 2 節 子どもの居場所の可能性と課題

第 3 節 経済的に困難な家庭で育つ「子どもの居場所」の事例

① 無料学習支援について—「NPO 法人 無料塾ひこざ」を事例に—

② 子ども食堂について—「要町あさやけ子ども食堂」を事例に—

第 3 章 神奈川県無料学習支援団体 S 塾の事例

第 1 節 神奈川県の無料学習支援団体 S 塾の概要

第 2 節 聞き取り調査の概要

第 3 節 聞き取り調査の結果と分析

第 4 節 「子どもの居場所づくり」に必要なこと

おわりに

はじめに

日本の子どもの貧困対策のひとつに、無料学習支援が挙げられる。この活動では、子どもたちが安心していられる場所をつくるのが最も重要であり、そのような環境が整えられた上で、

貧困を乗り越えるための支援をするべきだと考える。本論では、「子どもの貧困」の現状と課題について論じ、「子どもの居場所」とは何かを明らかにする。具体的には、神奈川県の無料学習支援団体 S 塾の事例を中心に、子どもの居場所の可能性と課題を示した上で、子どもにとって望ましい居場所とはどのような場所であるのか考察する。

1. 子どもの貧困について

本論では、子どもを 17 歳以下とし、子どもの貧困とは現代社会を生きる上で、多くの子どもたちが送っている通常の生活や経験ができない状況であると定義した。厚生労働省の「国民生活基礎調査」によると、2021 年の子どもの貧困率は 11.5% であり、約 9 人に 1 人の子どもが相対的貧困状態にある。本論では、子どもの貧困の構造として、「世代的再生産」があることに着目した。保護者の価値観や経済的・精神的・時間的な余裕のなさによって、経済的に困難な家庭で育つ子どもが自己肯定感や学習意欲が低下したり、人づきあいが限定されたりするなどの問題は大きい(堀 2014)。このような問題が、次の世代にも再生産されることの問題が何よりも大きいと考えたからである。

2. 子どもの居場所の可能性と課題

「子どもの居場所」について、本論では子どもがありのままの自分でいられて安心できる場所であり、同時に自己肯定感や自己有用感を高められる場であると定義した。経済的に困難な家庭で育つ子どもの居場所づくりで代表的なものは、「無料学習支援」と「子ども食堂」である。

どちらの活動も、2010 年代以降に広まりを見せている。無料学習支援は活動内容が様々であり、学習支援に加えて、食事の提供を行う団体もある。また、小中学生や高校生を対象とした授業の補習だけでなく、外国籍の子どもを専門とする塾や高卒認定試験の対策を専門とする塾も存在する(日本非営利塾協会 2019)。一方で、子ども食堂は地域の多様な世代が交流できる場であるため、子どもの貧困対策にとどまらず、保護者や高齢者にとっても重要な場となっている(湯浅 2020)。本論のテーマである子どもの貧困の世代的再生産を断ち切るうえでより重要となるのは、貧困世帯の子どもでも通える無料学習支援の存在である。

3. 神奈川県無料学習支援団体 S 塾の事例

本章では、子どもの居場所づくりの事例として、神奈川県の無料学習支援団体 S 塾を取り上げた。S 塾の代表者 O 氏(56 歳女性)に、無料塾の現状や課題について聞き取り調査を行い、子どもの貧困対策や居場所づくり活動は今後どうすれば良いのか考察した。S 塾は、2016 年に O 氏によって設立され、「家庭の経済格差を教育格差にしない社会を実現すること」を理念として、経済的な理由で塾に通えない中学生を対象に、毎週日曜日に無料で学習支援を行っている任意団体である。O 氏への聞き取り調査から、S 塾の特徴として、当初は経済的に厳しい家庭の子どもが多かったが、現在は学校や他の塾への適応が難しい子どもなど多様な背景を持つ子どもが入塾していることが明らかとなった。そして、子どもの貧困において一番の課題は、大人が子どもたちをお金の有無によって判断し、経済的に困難な状況にある子どもを一方的に「貧困者」と決めつけて対応する姿勢にある。貧困がもたらす影響やその対策に目を向ける以前に、大人がそのような価値観を子どもに押し付けている現状を見直す必要がある。S 塾では、ボランティアの負担よりも、子どもたちが学習しやす

い環境を何よりも優先して整えていたことが明らかとなった。大人の都合を優先したサポートをするのではなく、子どもたちが今何を必要としているのかを考えて支えることが子どもの居場所づくりにおいて重要である。さらに、O 氏は支援の場において上下関係はないことを強調していた。子どもの支援の場では、大人も子どもから学ぶ姿勢を大切にして対等に関わることが求められる。

おわりに

これらを踏まえ、「子どもたちにとって望ましい居場所」には重要な点が 2 つある。ひとつは、子どものことを第一に考えて行動することである。大人の自己実現のために行動したり、他の子どもと比較したりするのではなく、一人ひとりの子どもの成長に目を向けて寄り添うことが重要である。もうひとつは、大人と子どもが対等な立場で関わることである。支援の場において「支援する側とされる側」という上下関係はなく、対等に関わることが重要である。子どもの特性や家庭状況を理解し、子どもの成長を第一に考えて寄り添うことが何よりも大切である。

主要参考文献

- 阿部彩, 2008, 『子どもの貧困—日本の不平等を考える』岩波新書
- 萩原健次郎, 2018, 『居場所—生の回復と充溢のトポス』春風社
- 船橋理仁, 2022, 「学習支援の目的としての『居場所』—生活困窮世帯等の中学生を対象とした学習支援に関する研究レビューを通して—」『教育論叢』名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教育科学専攻 65 号: 47 - 54
- 堀夕葵, 2014, 「子どもの貧困問題と貧困の連鎖の解決に向けて」『香川大学 経済政策研究』10 号: 37-49
- 山野則子編, 2019, 『子どもの貧困調査—子供の生活に関する実態調査から見えてきたもの』明石書店